日独スイス教会協議会報告

**「もうひとつの宗教改革」** 牧師 大石周平

四月二九日～五月六日、スイスのアールガウ州を拠点に行われた協議会に、日本キリスト教協議会（ＮＣＣ）ドイツ語圏教会関係委員として参加しました。一五一九年にチューリヒ大聖堂で歴史的なマタイの連続講解を始めたツヴィングリの宗教改革から五〇〇年を記念して、（ルターの改革とは異なる強調点をもつ）「もうひとつの宗教改革」という主題が掲げられ、改革教会の伝統に焦点が当てられました。同協議会がスイスで開催されたのは、今回が初めてでした。ルター派の強いドイツ福音主義教会とは長年協議会がもたれていたのですが、二〇一六年からそこに、スイスプロテスタント連盟が加わり、新たな交わりが始まっていたのです（三年前の協議会の報告書『いま、宗教改革を生きる――耳を傾け共に歩む――』が、いのちのことば社から出版されています。筆者も翻訳チームに加わるとともに、詩編歌に関する一文を寄せました）。

前回は、ドイツ・スイスからの代表が福島のいわき市を訪問されましたが、今回は、いわき市からの牧師も含む様々な教派の代表が、アールガウ州で再会しまた出会うことになりました。アルプスが生んだ美しい湖を臨む研修ホテルでしたが、ここに向かう途中の車窓から、当地の原子力発電所の煙が見えたことは象徴的だったと言わなければなりません。

今回の焦点は、ツヴィングリをはじめとする改革教会の伝統です。それは、今年発行のツヴィングリの記念切手に印字された改革者自身の言葉「神の御心のためになそう、何事か勇敢なことを！」に集約されますが、私なりにまとめると、「神の御前で、聖書原典の全体に御心を問いながら、共にキリストに従い、世の図式から解放されたものとして勇気をもって弱者に寄り添い、教会と社会の共同体に具体的に生きる霊肉のあり方について」となります。最初の三日間でホテルに缶詰めになって対話した際や、その後、宗教改革ゆかりの都市のフィールドワークの中うかがった各講演題に、今回の関心の一端があらわれています――講演①「現実主義的な倫理の行為としてのツヴィングリ宗教改革」／講演②「『世俗の中の世俗の子』バルトのツヴィングリ受容～改革者の人間、教会、政治の理解に関して彼が覚えた緊張に光を当てて」／ 講演③「約束に伴う義務～神との契約の社会的側面」／ 講演④「（人文主義者）エラスムスと改革者たちによるその受容」――。

私自身は、②への応答として、バルトのバルメン宣言に流れ入るツヴィングリ以来の「聞き」「信頼し」「服従する」キリスト者の生の理解について発題しました。日本では「令和」の始まりに浮足立つ日でしたが、バルメン宣言の強調した「キリストのみ」の主権と時の支配、個人の信仰に留まらない教会・社会を形成するキリスト者の応答責任の理解が大切だと学びました。 四日目以降は、チューリヒ・バーゼルおよび首都ベルンを訪ねました。単に歴史を偲ぶだけでなく、各地の難民・移民の教会やあらゆる境界を越えたプラットホームの現場、老人福祉施設、具体的に地域の子どもたちに開かれた教会等を訪ね、移民の方々や、教会のディアコニアの指導者や奉仕者、福祉施設の従業員、クリスチャンの国会議員などから直接話をうかがいました。スイスプロテスタント連盟の代表者いわく、このようにして具体的に「ツヴィングリ以来の改革派の伝統」が生きている、とのことでした。信仰とは、「われのため（pro me）」だけでなく「われらのため（pro nobis）」のキリストの救いへの具体的な信頼なのだ、と思いました。

 チューリヒでは、具体的な教派間対話と祈りの機会もありました。私たちは、改革の負の側面である（再）洗礼派の処刑がなされたリマト河畔の現場を訪ね、十年ほど前にスイス改革教会が洗礼派の思いを受け継ぐメソジストやバプテストの代表者を前に謝罪を表明した場所で、和解と平和を求める祈りの時を持ちました。日本バプテスト連盟の吉高叶代表が、「今は教派を問わず、社会が、私たちが、だれかを排除し断罪している現実がないか。現在の『異端』は誰だろうか」と問われたことが印象的でした。

 最後は、豊かな礼拝体験でした。主日朝には三つの教会に日本人説教者が立てられ、午後には全員アールガウ改革教会に集い、ヨーデル讃美と伝統的式文の統合された聖餐礼拝に与りました。そして礼拝の交わりにこそ、御言葉により絶えず改革される教会の、変わらない拠り所があると実感されました。